

2020

August

275号



●医療法人創和会広報誌はあもにい / 発行 医療法人創和会 理事長 重井文博

令和2年8月1日発行

はあもにい

創和会史上初！ 第1回 オンライン朝礼 ～研究所附属病院で開催～

新型コロナウイルスの流行に伴い3密を避けるため、7月6日（月）に研究所附属病院では初めてとなるリモートによるオンライン朝礼を導入しました！初めての取り組みということもあり、各部署のPCにきちんと映るかどうかなど、下準備を綿密に行なってからの実施となりました。



▲リハビリテーション部



▲事務部



▲新入職員の紹介



▲血液浄化療法センターには大きなモニターを付けました



▲講義室での様子

朝礼当日は、密にならないよう距離感に注意しながら、各部署でPCから真鍋院長のお話・新人職員の自己紹介などを聞いていました。

オンライン朝礼に参加された方の中からリハビリテーション部の松久保室長にお話を伺ったところ、「オンライン朝礼による利点は、講義室まで移動する必要がなく、カルテ入力や事務作業の傍らに一時的に作業を止めて朝礼に参加できることです。また、朝の外来患者さんの待ち時間の間に、部分的に参加することも可能となりました。今後は更に進化し、講義室での開催と比べて、双方向でのコミュニケーションがとりやすくなることを期待しています。」という感想をいただきました。

今後もこのオンライン朝礼は継続されるようで、院内のイベント自粛に伴い他部署との交流機会の少ない新入職員の紹介などが引き続き行なわれるそうです。

新しい取り組みでまだまだ試行錯誤の日々が続きますが、“より充実した朝礼になっていけば良いなあ”と感じています。

（山本）

「岡山 JRAT」

展示ブースのご紹介

～災害への備え

リハビリテーション篇～

しげい病院 リハビリテーション科 医師 外蘭 昭彦

近年、毎年のように「数十年に一度」といわれる規模の豪雨災害が日本各地で発生してしまっている状況です。九州や中部地方を中心に甚大な被害をもたらした令和2年7月豪雨災害においては被災者の方々に心よりお見舞い申し上げます。報道をみてありますと、2年前の記憶が鮮明によみがえります。本県でもいまだ多くの方が仮設住宅での生活を余儀なくされており「西日本豪雨災害」も決して過去の出来事ではございません。

水害や地震、そして昨年末から世界中の人々の生活を一変させた新たな感染症の流行など、あらゆる災害に対し我々医療者は立ち向かっていかねばなりません。災害時に救急医療支援が必要であることは言うまでもありませんが、そこから「新たな日常」を取り戻すまでには、リハビリテーション（以下、リハ）の介入が求められます。

「リハビリテーション」の語源はRe（再び）-Habilitare（ふさわしい状態にする）からきており、我々リハ診療チームが日頃から患者さんと共に目



指す最終的なゴールは、ご本人・ご家族の生活をより良いものに導くところにあります。

災害では、それまで当たり前にあった日常生活が突如として失われます。避難所の環境整備や福祉用具の確認、生活不活発病のリスク管理など多くの確認や調整が求められます。そのような災害支援にあたる医療チームが JRAT : Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team（日本災害リハビリテーション支援協会）ですが、西日本豪雨を契機に本県にも「岡山 JRAT」が発足し、県下のリハ関連病院のスタッフがこれに所属しております。しげい病院も積極的に参加できるよう協力体制を整えており、この度その活動をより多くの方々に知っていただけるよう院内にも展示コーナーを設けました。

透析とリハの病院として地域に根ざし、災害時にも貢献していけるよう今後とも皆さまのご理解とご協力をどうぞよろしくお願いいたします。

駐車場管理機器を更新しました

しげい病院 総務課 係長 俣野 圭一



▲西駐車場

しげい病院では、正面玄関道路向側（西駐車場）に、2002年2月19日から「不正駐車防止と外来患者さまの駐車スペースを確保する目的」のために、ゲート式の駐車場管理機器を導入しています。

近年では、経年劣化による駐車券の読み取りエラーや釣り銭トラブルなどが頻発し、度々職員が対応しなければならぬ事例もありました。そして、18年以上が経過した駐車場管理機器の経年劣化によるメイン基板や内部通信基盤等の破損に加え、部品製造中止による部品供給ができなくなったため、6月15日より取替工事を実施すること

になりました。

作業工程は、旧機器及びテントの撤去から開始し、基礎掘り・配線路はつり・ループコイル埋設等一連の基礎工事を行なった後、27日から新しい機器の設置・調整を行ない、7月4日より稼働開始しました。取替工事では、利用者さまの意見も反映し、発券機の設置場所を2.5m奥へ移動させることで車両がスムーズに入場できるよう変更しました。

今回の更新により、利用者さまも気持ちよく入出場ができるようになると思います。

岡山県の血液透析医療の歴史

医療法人創和会 重井医学研究所附属病院 名誉院長 福島正樹

岡山県の血液透析医療は、開設 10 周年を迎えた重井病院（現しげい病院）で 1968 年に開始されました。この年は、東京大学医学部のインターン制度改善要求運動に始まる東大闘争に新左翼学生によるベトナム反戦運動・第二次反安保闘争が加わって全国に学園紛争が波及し、多くの大学がバリケード封鎖に入り社会問題となった年でした。当時、岡山大学第一外科では腎移植拒絶反応の研究を進め、臨床的体制をほぼ完成して腎移植の絶対条件である人工腎の入手を待つばかりでした。翌 1969 年、重井病院よりミルトン・ロイ社製キール型人工腎 2 式のうち 2 号機が岡山大学第一外科学教室に無償供与され、岡山大学の透析室開設、生体腎移植、さらには肝移植への道が開かれることとなりました（創和会創立 30 周年記念誌、折田薫三教授祝辞より）。

のちに名付けられた「団塊の世代」が当時の社会状況を思い浮かべながら、いくつかの資料を参照して書いた「岡山県の透析医療の歴史」を「第 100 回岡山透析懇話会記念誌」より以下に引用します。

わが国における透析医療の始まり

1945 年に Kolff は、回転ドラム型透析器（コルフ型）を用いて世界初の人工腎臓による生

存者を報告した。その後、朝鮮戦争（1950 ～ 1953 年・昭和 25 ～ 28 年）を契機に、急性腎不全の治療として人工腎臓が注目されるようになった。日本では、1952 年より東京大学の木本外科で実験的な研究が始められ、1954 年に Skeggs 型改良透析装置が初めて急性腎不全の患者に使用され、翌 1955 年には Alwall 型改良装置が慢性腎不全患者の治療に用いられた。以後、慶應大学、慈恵医科大学、名古屋大学、北海道大学、千葉大学など各大学で人工腎臓の試作や小型化の研究が盛んとなり、1957 年には人工腎臓のほか、合成高分子による代用血管、人工心肺、人工肝臓、代用血漿などの研究推進のため人工内臓研究会が発足し、1963 年の「日本人工臓器学会」に発展した。

一方、腹膜透析は人工透析より少し早く臨床応用され、1953 年の日本循環器病学会で、九州大学から初めての臨床報告がなされた。特別な機器を必要としない間歇的腹膜灌流法は、主に大学の内科系教室で広がり、1964 年には腹膜透析研究会が発足したが、透析効率が悪く、長時間を要することから、主流は人工腎臓となり、1967 年にこの研究会は解消して、1968 年に「人工透析研究会」が発足した。

当初人工腎臓のダイアライザーはコイル型が中心であったが、高価であること、血液充填

および体外循環血流ポンプが必要なことなどよりキール型ダイアライザーが多く使われるようになった。しかし、スタンダードキールはセロファンまたはキュプロファン膜を張って組み立てるため、ホルマリン消毒による目、鼻への刺激、膜破損や血液にふれることによる血清肝炎などの問題があった。透析液供給装置は、最初はコイル使用のコルフ型であったが、日本ではタンクで 1 回の透析に必要な透析液を一度に作り、100L を 2 時間回して透析した後に液交換を行い、再度 2 時間透析するバッチ型が大部分であった。その後しだいにバッチ型から透析液使い捨てのシングルパス型に変わり、ヘパリン注入も自動化された。なかでも 1969 年に広島大学、新潟大学、東京大学、金沢大学に入ったミルトン・ロイ社製キール型人工腎臓装置は、水道の蛇口に接続してボタンを押すと、透析 OK のサインまですべて自動化された便利なものだったが、当時 1 台 560 万円の機器が一般の病院に入るには高価過ぎた。東京大学では、大学紛争による医学部ストの影響もあって、臨床使用は 1 年余であったが、木本外科の太田和夫先生が、腎炎、腎不全、腎移植へ、と一貫して治療を施すことのできる施設をつくるため、1970 年正月 1 日から東京女子医大に移り、同年 2 月に循環器研究所（循研）製の旧型コイル式人工腎

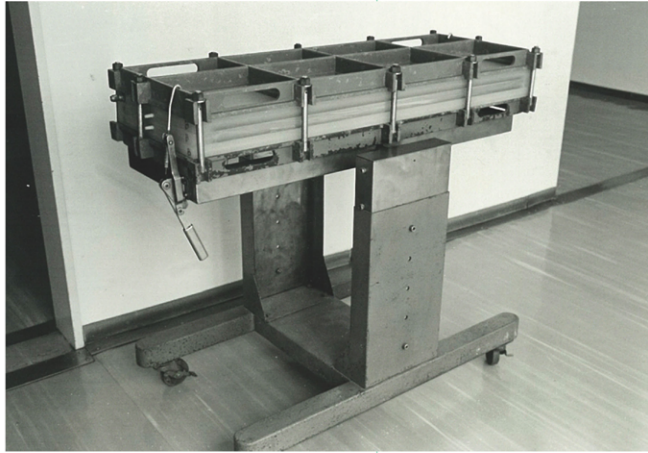


図1 キール型ダイライザー

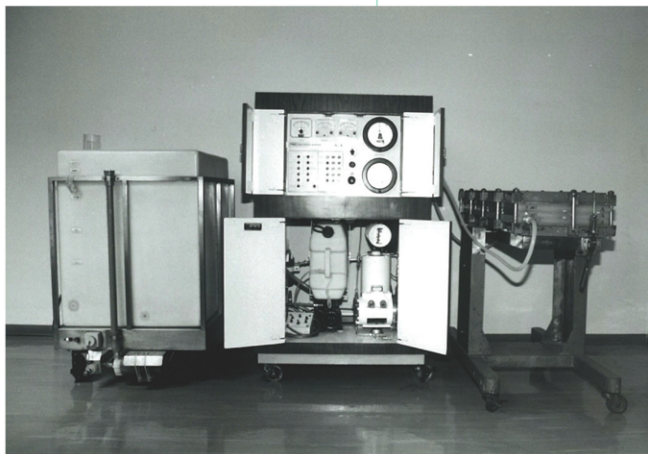


図2 ミルトン・ロイ社製人工腎臓装置

写真提供：医療法人創和会 理事長 重井文博

臓で血液透析を開始した。これが、日本初の東京女子医大「腎臓病総合医療センター」の発祥であった。

倉敷で始まった岡山県の血液透析医療

岡山県では、1968年11月に重井病院（現しげい病院）がミルトン・ロイ社製人工腎臓装置を初めて導入し、腎不全患者の治療を開始した。また、これに遅れること数日（と聞く）、同年12月に倉敷中央病院で、同

じくミルトン・ロイ社製人工腎臓装置2台による血液透析が開始された。治療に携わったのは、いずれの病院も主として岡山大学旧第一内科の医師たちであり、また、重井病院における導入には、創和会設立10周年に際して当時の小坂淳夫教授の導きもあったと聞いている。かつて天領であった倉敷市にあるこの二つの病院は、規模と設立母体、時期の違いはあるものの、いずれも困窮によって生じる病气から庶民を守ることを使命に掲げていた。その後、重井病院

は1970年に人工腎臓センターを新設し、また1978年には腎疾患の原因解明のため重井医学研究所を岡山市に開設し、併せて翌1979年に医学研究所附属病院を付設した。現在、創和会は倉敷市と岡山市の二つの病院を合わせて240台の透析ベッドを有し、650人以上の血液透析を行っている。

一方、倉敷中央病院は各科の施設を完備した総合病院の人工透析センターとして血液透析療法に取り組み、段階的に透析ベッドを増やし、特殊病態に対するベッドを含めて現在44台で稼働しており、新規導入数は県内トップクラスである。また、人工腎臓にとどまらず、1978年にクラレエンジニアリングと共同して、活性炭による吸着型血液浄化装置を人工肝補助肝臓として使用し、劇症肝炎患者を救命した。現在、各種病態に対する血液浄化療法が、血液内科、循環器内科、麻酔科など他科協力のもとに行われている。倉敷中央病院としげい病院は、よきパートナーとして密接に連携し、腎不全患者の急性期から回復期、慢性期の医療を行っている。

岡山大学第一外科では、1959年から癌免疫と移植免疫の研究が開始され、1967年頃には腎移植の体制がほぼ完成していたが、移植腎拒絶による機能廃絶に備えて人工腎の入手可動が絶対条件だった。1968年、國米欣明先生が広島大学で当時の最も進んだキール型人工腎のノウハウを習得し、1969年2月に重井 博理事長よりキール型人工腎の2号機が、岡山大学第一外科研究棟に無償供与された。この2号機が岡山大学医学部に透

析室が設けられる引き金となり、第一外科の腎移植さらに肝移植への道をも拓き、1973年3月には生体腎移植1号、ついで1974年4月に死体腎移植1号が行われた。

岡山大学では、1970年に医学部附属病院に人工腎臓室が設置され、岡山済生会総合病院は1971年に人工腎センターを開設し、川崎医科大学では、1972年に腎臓アレルギー部門に荒川正昭先生が就任後、血液透析療法が始まった。1975年代に入ると、岡山県における血液透析治療の黎明期に貢献した先生方が次々と開業し、透析療法が普及した。また、岡山大学では、1981年に太田善介先生が教授就任後、旧第三内科が透析療法を担当することとなり、2003年に人工腎臓室は血液浄化療法部と改称された。

岡山透析懇話会は、第1回目の日時は不明だが、1970年3月20日に第2回が開催され、当初は1ヶ月毎に開かれていた。当時の血液透析の状況を、創和会創立30周年記念誌から以下に引用する。

長方形の台にセロファンを張り重ね、血液層と透析層を交互に通るだけの単純な装置に命を預ける人々、余命は精々1年あるだろうか。外シャントは次々と造り替えられ、やがて四肢は壊死し「だるま」となって死に至る生き地獄も待っている。1971年、当院で透析による3年生存の記録が出た時、全透析患者と全病院職員が会議室に集まり、祝宴が開かれた。長期生存の光が見え、透析患者は歓喜した。しかし、この喜びは間も

なく悲劇に転ずることもあった。月々の莫大な出費のため家計は破綻、財産の売却を余儀なくされる。家庭崩壊、透析を中断し自宅へ帰って死の道を選択、シャントを抜いて自殺等々。まさに「金の切れ目が命の切れ目」であった。

倉敷で血液透析が始まった年の前年、1967年10月から透析医療が医療保険の給付の対象となったが、当時は健康保険本人10割、家族5割、国民健康保険7割の給付であった。保険適用後も人工腎臓は透析必要者に対して約10人に1台の割合しかない順番待ちの状態であった。医師たちは集まって、「誰を生存させ、誰を死亡させるべきか」選別し、親族会議を招集して、不動産売却による治療費の確保策に関わることもあったという。結果として、1970年頃の透析患者は働き盛りの男性が約8割で、女性、子供、高齢者は選ばれなかった。その後、1972年に腎機能障害が身体障害者福祉法の対象となり、人工腎臓に更生・育成医療が適用されることになって、患者は高額な自己負担なく透析治療を受けることができるようになった。

おわりに

透析が受けられない時代には、腎不全は尿毒症で死を待つだけの恐ろしい病気であった。しかし、人工腎が導入され、医療制度・公的支援の発展と相まって透析技術が進歩し、合併症が克服されるようになって、透析患者数は指数関数的に増加した。なかでも、当初は適応と考えら

れなかった糖尿病患者と高齢者が急増し、透析医療は、診療報酬引き下げという経営の問題に加えて非導入・見合わせという倫理的問題も抱えることになった。振り返って血液透析が始まった困難な時代を考えると、今後も必要とする患者に十分な透析治療が担保されるためには、生活習慣病によるCKDの予防、腎死に至る腎疾患の正確な診断と早期治療および進行抑制により末期腎不全患者を減らす一方、エビデンスの確立されていない高齢者の診療においては、人生の終末期における腎死を可及的に延長し、残腎機能とQOLを維持する透析方法を選択するなどの努力と工夫が必要と思われる。

参考文献

- ・前田貞亮：わが国における透析医療の歴史。大塚薬報 506：54-58, 1996.
- ・医療法人創和会創立30周年記念誌, 1988.
- ・倉敷中央病院75周年記念誌, 1999.
- ・ナチュラリスト 医学徒 重井 博の思い—医療法人創和会50年のあゆみ—, 2008.
- ・内橋克人：新版 匠の時代。岩波現代文庫, 岩波書店, 東京, 2011.
- ・兼田麗子：大原孫三郎—善意と戦略の経営者。中公新書, 中央公論新社, 東京, 2012.
- ・加藤明彦編, 臨牀透析委員会企画：透析医療のブレイクスルーを探り、将来を展望する。臨牀透析25周年記念別冊, 日本メディカルセンター, 東京, 1985.

第100回岡山透析懇話会記念誌、岡山透析懇話会（代表世話人 岡山大学病院 病院長、現岡山大学 学長 横野博史先生）、2015年11月発行

倉敷昆虫館所蔵の80年前の昆虫標本

(伊藤芳明コレクション)が倉敷市立自然史博物館へ

倉敷昆虫館 館長 岡本 忠

倉敷昆虫館の所蔵標本のうち最も古い標本が、表記の伊藤コレクションであった。

伊藤コレクションの内、チョウ類とトンボ類については倉敷市立自然史博物館に、他のコウチュウ類やハチ類が当館に所蔵されていた。

この度、これらの分散している標本を一箇所にまとめて保管することになり、当館の標本が博物館へ移されることになった。

伊藤コレクションの発見とその後の経緯については、故小野洋氏（1990年より当館職員、1997年から2012年まで館長）によって倉敷昆虫同好会機関誌「すずむし」125号（1990）に詳しく述べられている。

要約すると、1975年4月小野氏が倉敷市立茶屋町中学校へ転勤した際、理科教室の備品の中に多数の標本箱に収められた昆虫標本を発見し、一部は虫害で壊れた標本もあるものの、1938年前後に採集された、現在県内では絶滅したものなど貴重な標本が含まれていることがわかり、寄贈主を調査することになった。

1978年茶屋町中学校は閉校となり、小野氏とともにこの標本も新設の東陽中学校に移され、この貴重な標本は理科準備室の専用戸棚で保管することになった。

その後も多くの方々の協力を得て寄贈主の調査が続けられ、ラベルの採集年、採集場所、採集者のイニシャル等から、当時岡山第一中学校（現朝日高校の前身）の博物同好会で活発に活動され、第六高等学校（現岡山大学の前身）に進学していた伊藤芳明氏の標本であることが判明したので、小野洋氏はご本人と連絡を取り、次の2点について快諾を得たのち標本移転および発表原稿の準備がなされた。

- （1）寄贈標本の保管場所を倉敷市立自然史博物館へ移させていただく。
- （2）岡山県内産標本について、「すずむし」誌上への紹介発表をさせていただく。

これらの標本の内、トンボ類とチョウ類は他の類に比べて同定（種名を特定すること）が比較的容易なこともあり、小野洋氏によって「すずむし」125号（1990）でトンボ類（県内産：37種66点）を、同126号（1991）でチョウ類（岡山県産：32

種46点）が発表された。

更に5年後の、同130号（1996）でコウチュウ類の内ハムシ科（岡山県産：45種67点）が発表されたが、他のコウチュウ類（コガネムシ科が主）と多数のハチ類については同定が進まないこともあり、未発表のまま今日に至っていた。

このような経緯から報告の済んだものの内、トンボ類とチョウ類は博物館へ移されたが、コウチュウ類とハチ類は当館に残されたままになっていたのである。

当館のリニューアル後2015年より小野氏の報告を引き継ぐべく準備に取りかかり、報告済みのハムシ科以外のコウチュウ類とハチ類の同定をその分野が専門の倉敷昆虫同好会の方々に依頼し、コウチュウ類はほぼ同定が終わり、ハチ類についてはその中のヒメバチ科についてのみ同定がなされ、「すずむし」153号（2019）に加藤学氏（同定は渡辺恭平神奈川県生命の星・地球博物館学芸員）により57種（内岡山県産44種）が報告された。この県内産44種のうちの25種が岡山県からの新記録である。このことから県内のハチ類を調査する人が少ないことと相まって、これらの標本が極めて貴重な記録標本であるといえるであろう。

しかし、いつまでもこのコレクションが二箇所に分散されている状況は解消すべきであるとの声が上がリ、すべての報告がなされないままではあるが、コウチュウ類（ハムシ科1箱100点）、同（コガネムシ科他2箱132点）、ハチ類（369点6箱）の計9箱を博物館に移転することになった。



▲ハムシ科標本



▲コガネムシ科標本



▲その他のコウチュウ類標本

この結果、筆者の生まれた1938年前後に採集された貴重な昆虫標本が、当館から保存管理体制の十分整った倉敷市立自然史博物館に収蔵されることになった次第である。

伊藤コレクションを移転した後の当館所蔵の古い記録の標本を見てみると、採集者が分からなく県外産のものでは1937年のものもあるが、県内産で採集者がはっきりしているものとしては、前館長小野洋氏が1946年9月16日に鶴形山で採集したヒカゲチョウの標本が最も古いものということになった。



▲いずれもハチ類標本の一部

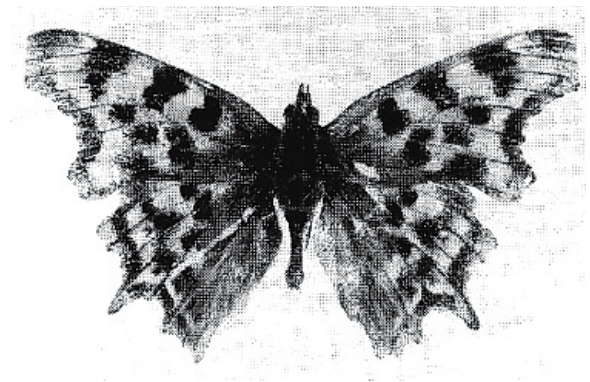
ここで、伊藤芳明コレクションの中で貴重なものをいくつか紹介しておく。

◎岡山県絶滅に指定されているもの

①シータテハ（タテハチョウ科）

1938年、岡山市外金山：現岡山市北区

[伊藤芳明採集]



▲82年前に採集されたシータテハの標本

当時は県南部にも生息していたことがうかがえる。

※本種の当館所蔵の県内産標本は2点。

(1956年、新見市阿哲峡)

(1964年、湯原町：現真庭市)

このうち後者は重井博氏（前理事長）の採集標本である。

②ベッコウトンボ（トンボ科）

1938年、岡山市外沢田（現岡山市中区）

※本種の当館所蔵の県内産標本は2点。

(1952年、備前町香登：現備前市)

(1964年、西大寺市奥谷津：現岡山市東区)

◎岡山県絶滅危惧Ⅱ類に指定されているもの

③ダイコクコガネ（コガネムシ科）

1940年、川上郡平川村：現高梁市

[平川延一採集]

※本種の当館所蔵の県内産標本は2点。

(1952年、那岐山)

(1961年、川上郡松原村：現高梁市)

ビオトープ便り ～クマゼミ記録～

倉敷昆虫館 小橋 理絵子

6月最後、梅雨のまっただ中で小雨が時おり降る朝でした。ビオトープの蛇口にいたのは、クマゼミ！今年初見です。下のネットのところには抜け殻がありました。お天気が待ちきれずに羽化したんでしょうね。写真を撮ったすぐあと、空に向かって飛んでいきました。

ビオトープのクマゼミ記録を遡ってみると

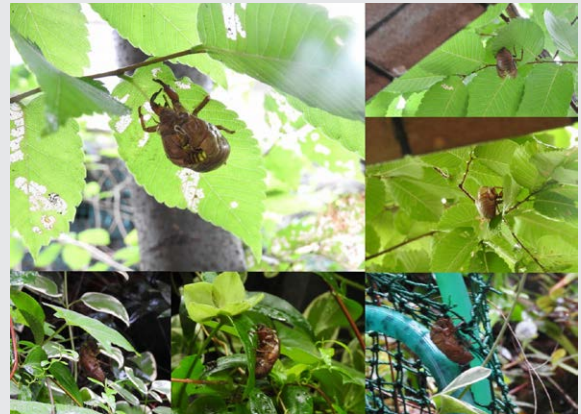
2015年6月28日	クマゼミ幼虫
2016年6月28日	クマゼミ抜け殻
2017年7月4日	クマゼミ
2018年6月26日	クマゼミ抜け殻
2019年6月29日	クマゼミ抜け殻

今年が特別早いわけでもなく、平均的なクマゼミ記録というのが見えてきます。何でも記録するって大切ですね。

7月9日(木)に、倉敷ケーブルテレビの夕方のニュースでビオトープのクマゼミの幼虫動画が取りあげられました。興味がある方は、ぜひビオトープを覗いてみてくださいね！



▲ビオトープのケヤキに留まってお食事中



▲クマゼミ抜け殻、増殖中！

■ ■ 確し物案内 ■ ■

重井薬用植物園

植物園を楽しむ会「処暑の朝の涼を楽しむ」

日時：8月23日(日) 8:00～10:00

会場：重井薬用植物園

編集後記

●我が家にルンバが来てもうすぐ4年になります。日々自動で掃除をしては清掃場所を報告してきます。累計清掃時間 600 時間以上、面積は東京ドーム 0.5 個分と活躍しています。導入からしばらくの間は、毎回どこから集めてきたのか大量のホコリを回収していました。時期を同じくして、なぜかキッチンマットが痩せ始めました。不思議！好き嫌いをしないで当たって確かめるタイプなので、コードを巻き込んで止まり、シャツを吸い込んで止まり、助けを求めてスマホに連絡してきます。風呂場のドアが開いていた日は、水を飲んで停止します。そして、触られて困るものは子供の手とルンバの届かないところに置くのがウチの生活様式となったのでした。(MK)

●今年度より研究所附属病院に、広報企画として入職いたしました。入職してすぐに2ヵ月間の外部研修に行っておりまして、病院に帰ってきてまだ日が浅く、わからないこともたくさんありますが少しずつ病院での日常に慣れてきました。この度、はあもにい編集委員になりましたので、院内での話題をたくさん見つけて皆さんに楽しく読んでいただけるようにお手伝いをしていけたらと思っています。まだまだ未熟ではありますが、精一杯頑張りたいと思いますのでこれからよろしくお願いいたします。(KR)



医療法人 創利会

生きることの尊さと健康であることの幸せを、すべての人と共に

しげい病院

〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)3655 FAX086(421)1991

岡山しげい訪問看護ステーション

岡山しげい居宅介護支援事業所
〒710-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)4300 FAX086(282)4301

重井医学研究所附属病院

〒710-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)5311 FAX086(282)5345

倉敷しげい訪問看護ステーション

倉敷しげい居宅介護支援事業所
〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)8111 FAX086(421)1991

重井薬用植物園

〒710-0007 倉敷市浅原20
TEL086(423)2396

重井医学研究所

〒710-0202 岡山市南区山田2117
TEL086(282)3113 FAX086(282)3115

倉敷昆虫館

〒710-0051 倉敷市幸町2-30
TEL086(422)8207



Instagram
はじめました！
shigei_hospital